

昨年は介護に明け暮れる日が続きました。介護は百人百通りとも言われます。私の場合は、片道450Kmほど離れた実家との遠距離介護、しかも義母を含めて3人の老親の多重介護、さらに介護する私ども夫婦も前期高齢者で、いわば老々介護と、難しさが重なってしまいました。これまでは何とか在宅介護を続けてきましたが、母の入院を機にそれを諦め、施設介護を模索しました。ところがいざ申し込むと、特別養護老人ホームやグループ・ホームはいずれも満床の状況でした。母の入院も加わり先の見えない状況に心が暗くなるばかりでした。私ども夫婦としては今は試練の時、そう言い聞かせながらの日々が続きました。そうした矢先、父が亡くなりました。しかし、葬儀を終えた直後でした。隣接するグループ・ホームで、父が亡くなった日に空きができたとのこと、希望するなら優先的に入所させても良いとの打診がありました。私は二つ返事でお願ひしました。このことは私にとっては、霧に覆われた中での「足前数歩に光」にも似た思いでした。

同時に聖書の言葉がいくつか浮かんでまいりました。「苦難のはざまから主を呼び求めると、主は答えてわたしを解き放たれた」(詩篇118篇5節)「苦難は忍耐を、忍耐は訓練を、訓練は希望を生むことを承知ですから。この希望は恥をかかせません」(ローマ書5章3～5)いずれも有名な聖句です。弱いがゆえに苦しむものにとって、自分の力に頼るのでなく、先ずは神を呼び求め、神に祈ることが大事だとの詩篇の言葉や、弱いがゆえに苦しみや苦難に遭遇したとしても、それが決して終わりではなく、その先に希望があるというパウロの言葉に慰められました。この間、試練、忍耐という言葉が頭から離れることはありませんでした。

さらにパウロはコリント前書10章13節で「神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていて下さいます」と語っていますが、この聖句は特に慰めとなりました。先行きの見通しが立たない、いわば予期不安の中で、父が亡くなった折、希望した介護施設に空きができ、施設責任者から入所の打診があった時は、私には「逃れの道」のようにも思えたのでした。

「幸せだから感謝するものではありません。感謝するから幸せなのです」私はこの言葉が好きです。私なりに苦しむ中、時々この言葉を思い起こし、もし苦しみをも感謝することができたとしたら、苦しむこともまた幸せかもしれない、そんなことを思ったりしました。

今回、あらためて苦しみと感謝について、ヒルティの「幸福論」(苦難をとおしての勇氣)を学ばせていただきました。この世は苦しみが絶えないという現実の中にあって、ヒルティは苦しみは進歩のため、甘やかされぬための試練であると伝えています。また、真実の感情を生む点において苦しみはいかなる善行にもまさるとも述べています。さらに、苦しみは真の意味でへりくだりを教え、そこに神に近づく道があり、この意味で苦しみは神が愛するものに与えられた恵みであると述べております。その上で、苦しむ時、神は近くいまし、幸福の実感は苦しみの中に高められる。ゆえに雄々しかれ!!ヒルティは苦しみと幸せについてこのように記し、

「苦しみの絶頂は神への帰順の場所である」と端的に述べていたのが実に印象的でした。

パウロは苦難にあったとき、イエスに対して「この苦しみを取り除いてください」と三度祈ったそうです。これに対し、イエスが返された言葉は「わが恵み、汝に足れり」だったとコリント後書12章は記しています。これもすごい言葉だと思います。しかもパウロは苦しみの中で、口では言えない、人間には語る事が許されない言葉を聞いたとも述懐しています。おそらく聖書は苦しみを不幸だとは教えていないのではないのでしょうか。そうではなく、ヒルティが語るように、苦しみこそ神への帰順の場所であり、感謝すべき道連れである、聖書は全体としてこのことを伝えてくれているのではないのでしょうか。